

目次

終章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
407	341	275	191	109	23	7

歌舞伎町ダムド

序 章

狩る側と、狩られる側。

野生動物の世界でなら、それは対等ということになるのかもしれない。釣り合いがとれている、と言い替えてもいい。

ライオンや虎、豹、狼といった大型肉食獣は、持ち前の攻撃力と凶暴さ、獐猛さをもつて獲物を狩る。片や鹿、シマウマといった草食動物は、一度その爪牙に捕らわれてしまえば、あとは食い殺されるしかない。乾いた大地に引き倒され、生きながらにして腹を裂かれ、筋肉に牙を突き立てられ、ずるずると内臓を引き出され、そのまま噛み千切られ、血を啜られるのはどんな気分だろう。

目の前を忙しなく行き来する毛深い四肢。入れ代わり立ち代わり自分の肉体を蹂躪する、悪魔たちの息遣い。辺りに立ち込める血の臭い、伸し掛かる体の重み、薄れていく意識——。

案外、興奮したりしてはいないか。命のクライマックス。生と引き替えに得る、一生に一度きりのオルガスムス。もしそのときに股間こかんを見ることが可能なら、自分でも驚くほどの射精を確認することができるのではないか。

しかし、草食動物には草食動物なりの強さがある。まずは逃げ足。駆けっこさえ速ければ、敵がどんな猛獣だろうと関係ない。当たり前だ。それと、群れを構成する同族の数が多いのも強みの一つだろう。ライオンに食われ過ぎてシマウマが減びた、という話は今まで聞いたことがない。たぶん目いっぱい食われても絶滅しないくらい、草食動物は子沢山なのだ。逆にいったら、食われることを想定して多めに子作りをしているともいえる。まさに「明るい家族計画」というやつだ。

中には、群れを守るためにわざと餌食えじきになる個体もいるという。自分が食われている間に仲間を逃がそう、という作戦だ。美しい自己犠牲の精神ではないか。自分の親兄弟か、ひよっとしたら妻や子供なのかもしれないが、今日まで一緒に暮らしてきた家族が、振り返れば悪魔どもの餌食になっている。寄つてたかつて食い物にされながら、目に涙を浮かべ、それでもみんなは早く逃げてくれと最期の祈りを捧たかげている。想像するだけで涙が出るではないか。そんな尊い精神があつて初めて、自然界のバランスは保たれるのだろう。

ただし、これを人間界に当てはめようとするが無理が出てくる。まず狩る側と狩られる

側を見比べても、ライオンとシマウマのようににはつきりとした外見上の違いがない。みんな人間。食うか食われるかは、見た目では判断できない。

それはたいいてい、狩る側の強みとして働く。

「ンーンツ、ンツ、ンンーンツ」

ベッドの上。両手首を腰のところ縛られた、全裸の女。裸にしたのは俺ではないが、手首を縛ったのは俺だ。口に無理やりブラジャーを詰め込んだのも、逃げられないよう両足首を縛ったのも、俺だ。まあ、うつ伏せにした上、腿の辺りに俺が跨っている、そう簡単に逃げられはしないのだが。

うるさい。騒ぐな。

後頭部に一発、拳をくれてやる。パサパサに傷みきった金髪。最初はナイフの柄で殴ったので、脳天には少し血の赤が滲んでいる。

ベッドから少し離れた壁際には、全裸の男が転がっている。女の服を脱がしたのは奴だろう。その場面は直接見ていないので知らない。むろん女が自分で脱ぎ、男の服も脱がしたという可能性もないではないが、そんなことはどうでもいい。男のイチモツはコンドームをかぶったまま、干乾びた犬のフンのように縮こまっている。いま確認できる事実はそれだけだ。

男の両手両足も縛り、口にもパンツと靴下を詰め込んであるが、今のところ女ほど抵抗

する様子はない。ナイフを持った俺とは多少距離があるから、まだ自分は助かるかもしれないとも思っているのか。だとしたら馬鹿だ。めでた過ぎる。

さて、どういうスタイルでやるか。

そう俺がいった途端、きゅっ、と女の両腿に力が入った。俺も下半身を露出しているの、このまま後ろから、しかもナマで入れられるとも思ったのだらう。馬鹿め。俺は、そんな下らないことはしない。俺は、もつともつと気持ちいいプレイを知っている。

たとえば、背中だ。

左手で撫でてやると、反射的にビクンと体を反らせる。まな板に載せられた魚。どんなに跳ね回っても、このベッドから逃れることなどできはしない。

まずは、こうだ。

魚の捌き方としてこれが正しいかどうかは知らないが、背骨に沿ってゆつくりと、真っ直ぐにナイフの刃を引いていく。

「ングッ、ンノーツ、ンノーツ」

こつん、こつん、こつん。背骨の凹凸をしつかりと刃先で感じながら、一直線に腰まで切れ目を入れる。切った瞬間は、骨と脂肪の色が白く覗く。だがすぐに血の赤が滲み、あつという間に色を増し、どす黒く傷口を埋めてしまう。

くぐもった女の悲鳴は続いている。感じているのだ。人生で一度きりの、最高のオルガ

スミスを。いいだろう？ 凄まじい快感だろう。死の予感を全身で味わったら、今までのセックスなんて、乳首をちよつとつままれた程度にしか思えなくなるだろう。

いったんナイフを傍らに置き、両手で肩甲骨の下辺りを押さえる。そして思いきり体重をかけ、左右に開く。

「ンギイイーツ」

傷口が一気に大きく裂ける。縦になった、巨大な目のようにも見える。化け物の赤い目が、女の白い背中からこっちの世界を覗き見ている——どうだ。お前にはどう見える。血肉で濁ったその醜い目玉は、この世界に一体何を見出す。

そろそろ、直に触ってやろう。

傷の内側、背骨と背筋の感触を直接指先で確かめる。血と脂肪のぬめり。骨に繋がった筋繊維。もう一度ナイフを握り、背骨から筋肉を切り離してやる。刃を寝かせて撫でるように、こりこりと優しく。ちようど、魚の鱗を削ぐときの刃の当て方に似ている。

背骨が、徐々に露出してくる。

壁際の男に目を向けると、だいぶ顔色が悪くなっていた。目に涙を浮かべてはいるが、表情は特にない。貧血でも起こしたか。

そんな他人事みたいな顔をしてないで、しっかり見ている。これだって、何回かは抱いた女なんだろう。お前のそのしょぼくれた息子を、ここに、何度も出し入れしたんだろう。

でも今夜、この穴に俺のは入れない。代用品は、このナイフだ。

「ンギイイイーツ」

女の股座またぐらにナイフを挿入してやる。入れるだけでは気持ちよくないだろうから、捻ひねりを加えながら、リズミカルに出し入れしてやる。

「ンギツ、イツ、ンイツ」

そうだろう。いいだろう。ナイフでセックスなんて、一生に一度しか体験できないぞ。相当感じているらしい。もう、出てくる血の量が半端ない。そんなに出したら死んじまうぞ、というくらいざぶざぶと溢あふれてくる。中を掻かき回しているだけだから、傷口の大きさはもとからあった穴とさほど変わらない。そこから湧わき出るように、ひっきりなしに血が流れ出てくる。噴はき出してくる。

いいだろう。感じるだろう。凄あいだろう。体が、とろっとろになっちまうだろう。あんな男のしょぼくれたイチモツより、こっちの方が断然いいだろう。なあ、イキそうだろう？ イキそうなんだろう？ それとも、もうイツたのか。

おい、どうした、こら。

いつのまにか反応が鈍にぶくなっていたので、軽く女の尻を叩いてみた。だが、たぶんと水袋のように揺れただけで、気持ちよかったとか、まだやめないでとか、女はなんの意思表示もしてこない。

どうやら、本当にイッてしまったようだ。

意外と、呆気ないものだ。

よっこらしよ、と血溜まりから腰を浮かせる。俺もだいぶ射精していたようだ。先っばから真下に、粘っこいものが糸を引いている。真っ赤に染まった、俺の精子。

俺はベッドから下り、ナイフを持ったまま男の近くまでいった。

男はぐったりと、すでに死んだように半分目を閉じている。

悪かったな。だいぶ待たせちゃったが、ようやくお前の番だ。幸い、俺のやり方には男も女もない。ケツの穴を穿り回すだけだから、お前にも、あの女とほとんど同じ快感を与えてやれる。

喜べ。

おい、喜べって。

男の方は、すぐに萎えてしまった。だから俺も、あまり気持ちよくなれなかった。順番を逆にするべきだったのかもしれない。終いがこうも尻すぼみだと、なんとも後味が悪い。だが、終わってしまったことは悔やんでも仕方ない。死んだ人間は絶対に生き返らない。流し台で手を洗い、シャワーを借りて全身に浴びた返り血を洗い流した。それから、冷蔵庫に入っていたビールを一本ご馳走になって、タバコを三本吸った。

改めて部屋を見回してみる。

この部屋の主は男の方だが、奴は決してここで暮らしていたわけではない。要はラブホテル代わり。女を抱くという、その目的のためだけに借りた部屋らしい。俺にとってはどうでもいいことだが。

四本目を吸おうか、もう一本ビールをもらおうか。ほんやり考えていたら、玄関のチャイムが鳴った。時計を見たら、いつのまにか約束の時間になっていた。そうだ。男が案外あっさりイッてしまったから、俺が時間を持て余す破目はめになったのだ。

玄関までいき、ドアスコップを覗いて確認すると、案の定よく知った顔がそこにあった。掃除屋のシンちゃん。親切のつもりかレンズに顔を近づけているので、もんわりと顔の中心が膨ふくらみ、さらに不細工が増して見える。

俺はロックを解除し、ドアを開けてやった。

ご苦労さん、と声をかける。

「どうも……あの、パンツくらい、穿はいたらどうですか」
立派過ぎて目のやり場に困るか。

「……ええ。まあ」

とりあえず俺はシンちゃんを招き入れた。

山登りにも使えそうな馬鹿デカイリュックを背負ったシンちゃんが、短い廊下を通って

部屋の戸口に立つ。そこから正面にあるベッドと、部屋の左側を交互に見る。

「また、ずいぶんと散らかしてくれましたね」

後始末がシンちゃんだと分かっていると、俺は安心して仕事ができる。安心というより、遠慮なく、といった方がいいか。

「仕事、ですか……だったらもうちょっと効率的に、シンプルにできませんかね」

仕事とはいえ、楽しんでできるに越したことはない。俺は、仕事を楽しむことにかけては天才なのだ。

「それはもう……間違いない、そうだろうと思いますけど」

シンちゃんは溜め息をつきながら、まず部屋の中心に一畳くらいの小さなブルーシートを敷いた。そこにリュックを下ろし、中身を並べ始める。洗剤のボトルが五本、ブラシやスポンジ、クロスも何種類かずつある。汚れをこそぎ取るヘラ、鋸のこぎり三本、包丁五本、黒いビニール袋も大量に。食品用のラップが三本、束になったプラスチックの結束バンド。それと、ジューサーミキサーが二台。

「あの……もう、お帰りいただいて、いいんですけど」

いや、少しだけシンちゃんの仕事ぶりを見学していく。シンちゃんのやり方は、毎回少しずつ新しくなっている。そんな研究熱心なところを、俺は心から尊敬している。

そう俺がいうと、シンちゃんは「はあ」と頷うなずいて作業に取りかかった。

しかし、死体を浴室に運び込み、野郎の腕と脚を胴体から切り離れた辺りで、俺は早くも飽きてしまった。

やっぱり、帰る。

「はい、お疲れさまでした。お気をつけて」

駄目だ。急に眠くなってきた。

真夜中の街をぶらぶらと、住処すまかを目指して歩き始めた。特に急ぐ用事はない。到着は朝になろうが昼になろうがかまわない。

途中に電話ボックスがあったので、そこに入った。着古したミリタリーコートのポケットから手帳を出し、アドレスのページを開く。

上田大助うえだだいすけ。ヤクザの組長としてはとんだ腰抜けだが、俺にとっては大事なお客さまだ。夜中だからか、コールは十回近く続いた。ヤクザが早寝早起きでもないだろう、さっさと出る、まさか女と姦やつてる最中じゃないだろうな、などと小さく悪態をついていたら、
出た。

『……はい、もしもし』

声が少しガラついている。やはり寝ていたのか。周りの音は特に聞こえない。

遅くに悪いな。俺だ。

『ああ、うん……どう、だった』

上手く殺つたに決まってるだろう。俺を誰だと思ってるんだ。

『ああ、そう、ね。うん。ご苦労さま』

シンちゃんからも連絡があるだろうが、奴はこの俺が、間違ひなく始末してやった。なので残りの金を約束通りもらおう。

『あ、うん、分かっている。それは、大丈夫。ただ、その……』

「ただ」とか「でも」といった話は聞きたくない。金は近々取りに行く。そのときに次の話もしよう。

『いや、あの』

四の五のぬかすな。お前のためだ。相手は誰でもいい。俺がブチ殺してやる。相手がどこの誰だろうと、俺が片っ端から始末してやる。この程度で弱腰になるな。お前は小さなことは気にしないで、ガンガン伸していけ。そして、日本一の親分になれ。俺がついてやる。気合入れて、ドンといけ。

『あ、その、だからさ……』

近々いく。金を用意しておけ——。

伝えるべきことは伝えたので、それで俺は受話器を置いた。

電話ボックスを出て、また一人歩き始める。

尻すばみに終わりはしたが、俺もそれまでにだいぶ射精していたのだろう。なんだか腰の辺りがふわふわとだるい。仕事を終えたあとの、心地好い倦怠感げんたいというやつだ。

途中に公衆便所があったので、そこで一発クスリを入れた。由来は知らないが、「NP」とか「エヌ」と呼ばれている、わりと新種の麻薬だ。これをキメると、最初にまず、ぶわっと体が大きくなったように感じる。その後、ちりちりと細かい刺激が全身に広がり始める。ちようど、セックスでイッたときの十倍くらいの快感が、股間だけでなく全身に行き渡るような感じだ。それが、約二時間持続する。正直、これを味わってしまったらセックスなんて馬鹿らしく思えてくる。

さらにいうと、痛みもほとんど感じなくなる。体に何か当たれば、当たったことは感覚的に分かるが、それが他人事に思えるほどダメージがない。分厚いプロテクターでも着けたらこんな感覚になるのではないか。だから、クスリが効いている間は殴られても、切りつけられても全然平気だ。しかも眠くならない。俺みたいな仕事の人間にはもってこいのドラッグだ。

あ、しまった――。

気持ち良過ぎて、便所の個室でのた打ち回っていたら、尻のポケットに挿さしていたナイフを落としてしまった。しかも便器の中に。しかし大したことではない。大便も小便もしていないので、水に濡れたただけだ。

七インチの、大型バタフライナイフ。

その昔、といつてもまだ七年くらいしか経っていないが、あの新宿歌舞伎町かぶきちょうをまるごと封鎖するという、とんでもない事件を起こした奴らがいた。彼らは「新世界秩序」を名乗り、当時の内閣総理大臣を拉致し、その命と引き替えに歌舞伎町の治外法権を日本国政府に対し要求した。そのあまりにもブツ飛んだ、クールも馬鹿も通り越して最高にヤバかったあの「歌舞伎町封鎖事件」に、俺は心酔した。完全に俺は「新世界秩序」の信者になっていた。

当時の俺はただの荒くれ者で、たまたま歌舞伎町に居合わせて、封鎖によってあの街に閉じ込められてしまったのだが、そのとき目の当たりにした光景が何しろ凄まじかった。

人が人を、平気で殺すのだ。いきなり撃つ。いきなり刺す。いきなり鉄パイプで殴る。一度殴り始めたら、延々と殴り続ける。やめてくれ、助けてくれと泣き叫んでいるにも拘わらずだ。やがて頭蓋骨が砕け、脳味噌が飛び出し、それでもやめず、アスファルトに転げ落ちた目玉をゴリッと靴底で踏みつけ、最後は中指を立てて「ファッキュー」だ。その後には、そいつは後ろから頭を撃たれて死んだ。撃ったのは女だった。果たして、あの三人はどういう関係だったのだろうか。

真面目そうなスーツ姿の中年親父が、路地裏で若い女をレイプしているのも見た。ヤクザ風の男を、キャバ嬢っぽい女数人が寄つてたかつて切り刻んでいるのも見た。歌舞伎町

一丁目の中心、シネシテイ広場での公開処刑も、雑居ビルの屋上から人が投げ捨てられるのも、ジープが道端の死体の頭を踏み潰つぶしていくのも見た。

そんな地獄絵図の中で、俺は彼に出会った。「新世界秩序」のリーダー、ジウに。そのジウが持っていたのが、これと同じナイフだった。七インチの大型バタフライ。ジウはこれを刃物としてだけでなく、ヌンチャクのようににも使用し、まさに蝶ちょうが舞うように美しく、蜂はちが刺すように容赦なく、殺戮さつりくを繰り返した。

あれで俺は、完全に目覚めた。それまでは碌ろくな人生ではなかったが、あれによって俺は、完璧に覚醒した。

俺の中にも、ジウがいる。俺だって、ジウになれる——。

手始めに、ヤクザ者を後ろから殴って殺した。粹いきがった黒服野郎も殺して吊るした。拾った拳銃で警察官も撃ち殺した。封鎖は思いのほか短時間で解除され、「新世界秩序」による歌舞伎町の治外法権獲得は幻に終わったが、それでも、あの興奮は俺の中に、確実に、別の命を宿した。

ジウは、今も俺の中にいる——。

これはあとから聞いた話だが、どうやらジウは、そもそも痛みを感じない体質だったらしい。いわゆる「無痛症」というやつだ。だから俺も、それを手に入れることにした。何か方法があるはず。そう思って探し回り、二年前にようやく出会ったのが「エヌ」だった。

これによつてまた一歩、俺はジウに近づいた。
いや。もうすでに、俺こそがジウなのかもしれない。

続きは中公文庫『歌舞伎町ダムド』でお楽しみください。